

施設入所している重複聴覚障害者への心理的援助の試み

—出入り自由のグループにおける取り組み—

石倉 陽子 (大正大学大学院人間学研究科臨床心理学専攻博士課程)

<要 旨>

本研究は、重複聴覚障害者（聴覚障害に加え視覚障害や知的障害、肢体障害、精神障害を抱えた人々）を対象に、自由時間における居場所のひとつとして、グループの参加や過ごし方を主体的に選択する場を目指して行ったグループの試みである。グループ経験をもとに、①グループの場作りに必要な条件は何か、②グループ体験が参加者にどのような意味をもたらしたのかについて考察を行った。

その結果、①についてはその場が「自分の領分である」と感じられること、基本的に行動の自由が認められているものの必要ときには毅然としたコントロールを行うことがグループ運営者に求められることが考察された。さらに、個別に応じて表現手段を工夫する必要を考慮し、適切なグループのサイズの検討を行った。また②については、グループ当初は受身的な態度が見られたが、次第に参加者の積極性が増し、自発的な要求が見られるようになったこと、制作活動の中で自分自身を見つめる体験を通し、個が満たされることから他者へ関心を向けるという流れが示された。

<キーワード>

重複聴覚障害、居場所、グループ、表現活動、主体性

【はじめに】

聴覚障害は、耳が聞こえないということに加えて、人とのやり取りに困難さを生じさせ、コミュニケーション障害とも言われる。聴覚障害者は、聞こえないためお互いに伝え合う経験が乏しくなり、人とのコミュニケーションにおいて大きな困難を抱えたまま成長していくことが余儀なくされている。その結果、本来持っている能力がうまく発揮されにくかったり、発達の課題を残したまま成人してしまうことが少なくない。生活状況によっては、個人の生存に関わるほどの深刻な問題をもたらす場合もある。

聴覚障害者の中でも重複聴覚障害者とは、聴覚に障害があることに加えて知的障害や視覚障害、肢体障害、精神障害などを抱えた人々である。重複する障害の状況によって、コミュニケーションの問題はさらに大きくなる。すなわ

ち、私たちが普段用いている音声言語はもとより、手話や筆談によるコミュニケーションも限られている場合が多く、独自の身振りやサインも使われており、コミュニケーションの手段は個別的に異なっている。そのため、一人ひとりの実態に即したコミュニケーション手段でのやり取りが求められるのである。

こうした障害の持つ特質と個々の生活状況による要因が複雑に絡み合い、様々な困難を抱えている場合が少なくないが、聴覚障害者を対象とした心理的援助に関する研究は着手されただけであり、主な研究としては、古賀・藤田・小林（1994）、河崎（1996, 1999, 2000）、並木・村瀬ら（2000）、並木（2002）が挙げられる。

筆者が本研究で関わった施設は、生活労働施設である。生活労働施設とは、施設種別では授

産施設にあたる。したがって、入所者はそれぞれ作業班に所属し、平日は1日に6時間の作業に従事している。障害が重篤なため、本来は本人の状態やペースに合わせてゆったりと過ごすことが望まれる場合でも、諸条件によって入所者は全員労働に従事することが求められる。入所者一人ひとりに様々な生活背景があり、施設で生活を送ることが余儀なくされる事情を持っているのである。

施設での生活は、施設職員の援助によって成り立っている。しかし、職員は非常に厳しい労働条件の下、絶え間ない業務に日々追われ、時間的な余裕が少ない。障害が重くなるほど日常生活をつつがなく過ごすだけでも必要なケアが増え、したがって入所者一人ひとりのペースで生活を送ることは現実として難しい。また入所者は、自分の生活を能動的に作り上げていくことの難しさも抱えている。例えば、日々の作業に自分なりのやりがいを見出せぬまま取り組んでいる場合、自分の意思で選択するよりも、恐らく周りから言われて「やらされる」と受け取ってしまう場面が多いのではないかと窺われる。また、作業が休みの日はたいてい、自室の掃除や布団干しなど身の回りの整頓に当てられている。自立度が高ければ、自由時間に自分で買い物や散歩に出掛けるなどできるが、入所者の多くは特にすることもなく手持ち無沙汰の状態、時間を持て余している。

このような状況に対し、入所者が生き生きと主体的に時間を過ごすことに少しでも寄与できないかと考え、心理的援助の一環として始めたグループの試みが本研究である。グループではこちらが積極的に課題を提供するのではなく、まずはほっと息のつける居場所となることが必要であると考えた。

相楽(1993)は聴覚障害者の自立の難しさとして、十分な情報がないまま自分のことが頭越しに周囲の人の判断で決まってしまうことが多い点を挙げ、自分で決定することへの自信の持ちにくさを指摘している。

居場所について青木(1996、2001)は、青年を対象に考察し、思春期外来における「たまり場」の実践を報告している。青年にとっての居場所を、大人から見えずぎない「影」を持った、それぞれの多様なあり方を認める場、何もしないことも尊重される場としている。そこで本研究におけるグループでは、自由時間における入所者の居場所のひとつとして、グループへの参加や過ごし方を主体的に選択する場となることを目指した。すなわち、(1)グループへの参加は本人の自由で、来たいときに誰でも来られる(出入り自由)、(2)その時間に絵を描くことも、何か作ることもよし、加えて何もせずゆったりとその場にいることも構わない、本人のあり方を認める場となること、の2点をグループの原則とした。

【目的】

グループでの取り組みを基に、①入所者にとって、グループが主体的に過ごす時間として体験されるのに必要とされる要因、②そうした時間を過ごすことが入所者にとってどのような意味をもたらすかについて検討・考察することを本研究の目的とする。

【方法】

2003年4月から2004年3月まで、施設内で開いていたグループ(全24回)をもとに、そこで起きたことをグループ経験として取り上げる。まず、グループ全体の経過を追う中で、①グループの場作りに必要な条件は何か、次に参加者個々への観察から、それぞれがグループをどのように体験していたのかを検討し、②グループの体験がどのような意味をもたらしたのかを考察する。

【対象者の概要】

ろう学校を卒業しても進路や就労の大変厳しい状況に対して、父兄を中心に重複聴覚障害者のための作業所が開かれ、その後「親亡き後」

の問題を正面に据えて入所施設建設運動が起こり、家族や学校関係者、聴覚障害者、手話通訳関係者らの協力の下、平成8年に重複聴覚障害者の生活労働施設が開所された。入所対象者は、重度（身体障害者福祉法での1級、2級）の聴覚障害と、その他の重複する障害のために生活や就労に困難を持つ18歳以上の人々であり、現在50余名が施設で生活を送っている。入所者の8割が知的障害を併せ持ち、その半数以上が最重度・重度の障害とされている。その他にも、視覚障害、肢体障害、診断名としての統合失調症、うつ病、自閉症、てんかん、行為障害を抱える人もおり、常時12～15名が服薬を受けている。コミュニケーション手段として手話を用いることができる人は2割程度であり、多くは限られた手話や指文字、筆談、独自の身振りなど、一人一人によって異なる。

【グループについて】

もともとは、個別面接や集団での取り組みの対象とならなかった入所者によって、自然発生的に生まれたグループである。まずは一人ひとりが息抜きできる場となることを目標とし、入所者同士の関わりが増えていくのは次段階の目標と捉えた。こちらから提供するものは基本的に、場所と時間と材料であり、グループには誰が来てもいいし、またいつ来てもいつ帰ってもいい、何もしなくてただその場に居ることも構わない。積極的に課題を提供するというはしないが、入所者から「こうしたい」という意見があればできる限り取り入れることを大事にした。

<グループの構造>

週の中で作業が休みである金曜日の、午後1:30～3:30に開いた。場所はその日空いている所を使わせていただいたため、どこで開くのかをその都度伝えた。こちらで準備したものは、画用紙（無地と色画用紙）・色鉛筆・クーピーなどの絵を描く道具、雑誌やカタログ・はさみ・のりなどコラージュができるもの、様々な折り紙と折り方教本、その他に紙粘土やビー

ズ、毛糸なども取り入れた。

【グループの経過】

24回のうち1度でも参加したことのある入所者は、全体の7割以上(46名/男性:25名,女性:21名)であった。参加回数の内訳について表1に示す。

さらに、各回の参加者と場所について、表2にまとめる。便宜上、一人ずつにアルファベットをふる。1～25は男性、26～46は女性である。グループに参加したときを○で表し、主に描画やコラージュ、折り紙など、制作活動をして過ごしていたときを◎で表記した。

表1 参加者の内訳

回数 性別	1~6	7~12	13~18	19~24	合計 人数
男性	12	5	5	3	25
女性	13	4	3	1	21
	25	9	8	4	46

(1) グループ全体の経過

グループの場所は、会議室・玄関ホール・男女それぞれの居室に隣接された談話コーナーの4ヶ所をその日の状況に応じて使わせていただいていた。場所によって参加者が変わっているため、二期に分けて記述する。

第1期 会議室・玄関ホールでのグループ（#1～13）

初回は、筆者からグループについて入所者に直接呼びかける一方、施設職員も声を掛けてくださった。ひとつの机は画用紙やクーピー、はさみや雑誌などの材料を置く場とし、4人でまわって座れるぐらいの規模で、4ヶ所にテーブルと椅子を配置する。座る場所は指定せず、それぞれが好きな位置に座ってもらうが、同じ作業班に所属する者同士が集まる（A,B,H,a,bさんの5名<イ班>と、E,G,c,dさんの4名<ロ班>）。ロ班は施設の中でも、重複する障害が最も重い入所者が所属し、ロ班で近くの公園や動物園へ外出すると、そのときの思い出について写真など視覚的な手がかりを基にそれぞれ

絵を描いて発表しあう、という取り組みが普段からなされている。そのため、Eさん達にとって絵を描くことは日常的であり、自分から必要なものを取りに行く人がほとんどであった。一方、I班に所属する入所者は筆者が促すまで席でじっと待つ人が多く、受身的な部分が目立った。グループは何かしなければならぬ時間と、課題的に捉えている様に窺える人もおり、改めて「絵を描いてもいいし、何もせずにゆったり休憩していてもかまわない、自由である」と説明。色画用紙を何色か提示し好きな色を選択してもらいなど、参加者が自分で選ぶ形で主体的に関与できるように心がけた。

参加者が表現するものに対して、巧拙に関わる価値評価でなく、その人がそこに込めた思いはどのようなことか想像しながら、“世界に唯一人のあなたがこれを描いた（作った）のですね”、というように、まずはそのまま大事に受け取るようにした。自分から作品を見て欲しいと働きかけてくる人に対しては、ただ受容することから少しやり取りが発展するように、できる範囲で説明を求めたり、筆者自身の感想や質問（例えば、「私もこれが好きです」や「この中で私はこれが好きですが、あなたは？」など）を伝えていった。

#3は、職員の会議があり玄関ホールにて開く。玄関ホールは普段から入所者が憩う場所のひとつであり、会議室よりもオープンで立ち寄りやすいため、参加者が一気に増える。自分自身は特に作品を作らないが、コラージュ用に置いてある雑誌を見たり（F,K,Qさんら）、他の入所者の様子を笑顔で見ながらソファに座っている人（O,Pさん）もいた。ところが、場の広さに比べて参加者が多く、雑誌の取り合いや、互いの距離が近くなり遊び半分でふざけあっているうちにエスカレートしていくなどの小競り合いが生じる。#4から描画やコラージュの道具に加えて、作品作りには興味を持ちにくい参加者のため、柔らかな感触のする紙粘土を新たに導入する。この日はちょうどI班の旅行が重なり、

グループに加わった女性職員に誘われて、H班に所属する入所者（I,Mさんの2名）が初めて参加する。この回は、女性職員2名以外にボランティアなど、筆者も含めて5名でグループを見守る。作品を作り終わると、嬉しそうに職員らに見せに行き、感想を求める人がいつもに増して多かった。個別での対応を求めていることが窺われ、#5では筆者から意識して、個別的な働きかけを心がける。参加者一人ひとりに対し、短時間ではあるが目の前の一人だけに集中して対応しようと気負ったため、他の入所者とやり取りしていると横やりを入れて必死で自分の方に筆者の関心を向けさせようとする人がいた。自分に関心が向けられていないのではないか、という不安が喚起されたと推察される。筆者が意識的に関わったことがかえって不自然な形となってしまっていた。

#6では、常に全体に視線を向けるようにし、参加者から働きかけがあったときなどに、自然な形で個別的に対応すると、前回のようなことは見られなくなった。常に全体に目を向けられることはすなわち、そこにいる自分にもいつも関心が向けられているという安心感にもつながったようである。グループの形態としては、それまで所属する作業班で集まっていたのがもっと小さなまとまりとなり、BさんとJさん、KさんとRさん、aさんとeさんのように、なんとなく2人であるようになる。

玄関ホールでグループを開くことが続く中、テーブルの上では手狭のため床の上にぺたっと腰を下ろして制作活動に夢中になる人が出てくる。その人のすぐ横を、他の人が歩いて通る状態は、対応のあり方からも衛生的な面から見ても適切でないと判断され、#10以降、カーペットを導入する。#10では、手話でのやり取りが可能な自立度の高い入所者（L,Qさん）もグループに加わったため、彼らを中心に参加者全員でひとつのものを作る機会として、面接室で使う棚の組み立てを行う。彼らに大部分を任せ、筆者はその他の参加者がそれぞれにできる範囲

で棚作りの工程に関われるように配慮した。すると、自ら積極的に棚作りに加わることが難しい人も、傍で自分に声がかかるのを待っていて、仕事を任されると、みな生き生きと意欲的に取り組む様子が窺われた。ひと仕事やり終えた達成感に浸りながら、作業に関わった同士で腕ずもう大会となる。#12では、所属する作業班に関係なく、過ごし方の違いによってグループのまとまりができる（絵を描く集まり、コラージュをする集まり、なんとなく様子を見て過ごす集まり）。そうした中で、自分の作品を周りに見せたり、相手が描いた絵の感想を伝えたりという相互作用が生じ始めたため、筆者も周りで様子を見ている入所者に、それとなく「この人がこれを作ったんですよ」など声を掛け、参加者同士の橋渡しをしていくことを心がけた。

第2期 談話コーナーでのグループ（#14～24）

玄関ホールは作業するには机や椅子が足りない場であり、また筆者一人で10人以上の入所者にきめ細かく対応するのに限界を感じ、#14以降はやむなくグループの規模を縮小させるため、居室に隣接された談話コーナーへ活動場所を移動させた。#14～#17はその移行期間であり、それぞれの場がどのような影響を与えるのか比較検討した。男性の談話コーナーではタバコで一服休憩を取る人もいて、女性が来にくさを感じていること（#17で女性の参加は2名のみ）が窺われ、#18以降は女性の談話コーナーをお借りしてグループを開くことにした。さらに#14から実習生やボランティアが加わり、常に2名以上の体制で関われるようになり、ゆとりを持って個別に対応できるようになった。そこで、幼い頃に遊んだと思われる、折り紙やおはじき、毛糸（編み物だけでなく、あやとりにも用いた）を導入し、2～3人で一緒に楽しめるよう試みる。折り紙や編み物では、自分の知っている折り方や編み方の知恵を筆者にレクチャーしてくれる入所者（E,o,sさんら）もいた。それぞれがグループの中で何をしたいのか、目的

を明確に持つようになり、それに従って「こうしたい」「これが欲しい」と要求が出てくるようになった。#20は男性のボランティアの方が加わり、そのため男性の参加者が一時的に増加したが、女性職員が参加した#23は、男性が減り女性の参加者が増えた。

（2）参加者個々の経過

グループ回数の半分（12回）以上に参加していた13名（A,B,E,F,G,H,J,K,S,a,c,e,h：男性9名、女性4名）について、個別に変化を追った。その際、主体的に参加していることの指標として「場への関与の仕方」を取り上げ、さらにグループ内における入所者同士の交流の変化を捉えるため、「対人関係」を大きな軸とした。それぞれについて、具体的ないくつかの場面をあげ、そこで観察された行動（例えば「場への関与の仕方」について：「参加の動機」3. 自発的に参加 2.声を掛けられると積極的に参加 1.言われたから受身的に参加）を評価し、グループを行う前後の比較を行った。

その結果、「場への関与の仕方」については、当初は施設職員や筆者に声を掛けられて、受身的な参加が多かったが、グループでの過ごし方が決まってくるにつれ全員が自発的に参加するようになった。画用紙や絵を描く道具など、提供されるものへの関心は、促されて利用する人が多かったのに対し、自分から必要なものを選んで利用するようになり、そのことと平行して、新たな材料を求めるなど積極的な要求を示す参加者も見られた。

対人関係については、グループの前後で大きな変化はないが、自分から作品を披露するようになったり、他者の作品へ興味関心を自発的に向けるようになる人が多かった。

グループにおけるごく限られた場面の記述ではあるが、居場所を見出していたと思われる参加者の一人について取り上げる。

Kさん（20代男性）

グループへの参加：#3～13,15,16の計13回参加（普段

行かない女性談話コーナーに移ってからは参加せず)。
コミュニケーション手段：ごく限られた単語の手話や
サインを理解し指差し(手差し)で要求を伝える。

グループでの過ごし方：製作は特にせず。雑誌やカタ
ログのページをめくる感触を楽しみ、時々自分の気
に入ったものが見つかる伝えてくる。

初回、施設職員から声を掛けられて参加を始める。椅子に座るよう促すと、自ら同じ作業班の仲間がいるテーブルに着席。雑誌やカタログを差し出すと、しばらくページをめくる感触を楽しむ。しかし長く続かず、床に仰向けになって天井に視線を向けたまま頭を左右に揺らしたり、窓際に立って外の様子を眺めたりと、テーブル・床・窓際の3カ所を行き来する。普段の作業ではこのような時、Kさんのタイミングにあわせた働きかけを職員の方が工夫されている。グループでも、しばらくKさんのしたいように任せ、筆者に視線が向いたとき興味の持ちそうなページを開いて雑誌を見せ、反応があったら椅子に着くよう促す程度の働きかけに抑えた。

Kさんにとってそれがかえって居心地のよさにつながったのか、グループ終了後、他の参加者が皆帰り、筆者が片付けを終えて部屋を出るまでなんとなくその場に残っていた。その後、毎回顔を出すようになり、施設職員からも午前中は居室から出てこなかったのに午後になったら玄関ホールに出てきた、との報告があり(#9)、この時間を待っているようだと言われた。

雑誌やカタログを自分の好みで選ぶようになり、ページをめくる感触を楽しみながらも気に入った写真が見つかる筆者に教えるようになる。「これが好きなんですね。おいしいですよ」と返すやり取りを繰り返すうちに、ただ指して教えるだけから、「おいしい」という手話表現がなんとなく見られるようになる。

時々、雑誌をただ持っているだけと見なされコラージュをしている他の参加者に雑誌を持っていかれてしまうことがあった。Kさんは一瞬不服そうな顔をし、返して欲しいと手を差し出すますがそれ以上のことはせずその場を離れて

しまう。そのような場合は、筆者の方でKさんはその雑誌が気に入っていることを相手に説明し、納得して本人に戻してもらうようにした。

筆者のみとのやり取りが続くが、#12に初めて他の人が作ったコラージュ(クッキーのギフトなどお菓子の写真が貼られたもの)に興味を示す。筆者から一緒に作ろうと誘い少し作ってみるものの、どうしてもその人の作品が欲しくて諦められない様子であった。他の参加者に関心が向いていないようで、実は周りの様子をよく見ていることが窺われた。

【考察】

①グループの場作りにおいて必要な条件

・物理的な場の特性、構成するメンバーの要因

第1期は#5以降、男性の参加数が圧倒的に多かったのに対し、第2期では参加人数は男女で大体同じ(毎回5~6名)となった。しかし男性ボランティアが参加した#20では男性が9名と増えている。逆に、女性職員が参加した#23では男性は4名に減り女性が11名と増え、そのうち2名(t,uさん)はその回に初めて参加している。女性入所者にとって、グループに興味を持ったとしても、男性ばかりの場に参加するのは勇気がいると思われ、特に#10は、棚作りという力仕事をこちらから提供したため、余計に参加しにくかったようである。#11で女性が2名に減ったことにも影響を与えていると思われる。特にuさんは、玄関ホールの際に一度、筆者から誘ってみたが、「いいです」と遠慮して去ってしまっていた。#23で普段一緒にいる女性職員が加わったことで、女性にとっては「自分も参加しても大丈夫そうだ」と大きな安心感を得たのではないだろうか。

一方、男性にとっての女性談話コーナーは、異性のプライベート空間であり、普段から必要以上に行き来することは慎まれている。グループがあるからとはいえ、遠慮なく談話コーナーで過ごす気持ちにはなにくかったと推測される。玄関ホールでは周りの様子を見ながらのんびり

過ごす人が多くいたのに対し、女性コーナーに移ってから制作活動が目的の人しか集まらなかったのも、当然のことと思われる。その中、#20の男性ボランティアの参加は大きく、その存在に支えられ「ここも自分の領分である」と安心して参加したのであろうと思われる。北山(1993)は、「自分」という観点から居場所について考察し、「自分の分」である場が確実に分け与えられ、自分が自分であるための環境と定義している。物理的な場が用意されているだけでは不十分であり、本人が「ここは自分の領分である」と感じられて初めて、その場が居場所となりうる。

・場の安全を守る

#3で、雑誌の取りあいや、相手との距離が近すぎて遊び半分のやり取りがエスカレートする小競り合いが生じた。「おしまい！」と、いたたまれずに自ら仲裁に入る人もおり、その回は何となく落ち着かない雰囲気であった。

場の安全が守られて初めて、ゆったりとその場で過ごしたり、自由な表現活動が促される。集団療法においても、場の安全確保が指摘されるように、いかに参加者が落ち着いて参加できるかが重要である。基本的に行動の自由が認められていたとしても、必要なときに毅然としたコントロールをすることがグループ運営者には求められる。

・グループの適切なサイズ

出入り自由のため、毎回グループのサイズが変動していたが、明らかに15名を超えると適切なタイミングでの介入が難しくなる。グループでは、人によって過ごし方が異なり、描画やコラージュなど制作を求めている人もいれば、一緒に話をしたい人もいる。多様な要求に対応すると同時に、その人に伝わるそれぞれの表現方法で応じることが求められる。したがって出入り自由と雖も、6~10名ぐらいのグループの大きさが適切であろうと思われる。

・グループの流れにあわせて提供する素材を工夫する

グループ内の関係を観察し、それにあわせて参加者同士の橋渡しとなるような働きかけ(作品を見せ合う、感想を伝える等)をしてきた。またお互いのやり取りが展開するように、2~3人で一緒にできるおはじきやあや取りなどを導入した。しかし、例えば一人ひとりの作品をひとつの物語作品に仕立て上げたり、大きな紙に皆で描くなど、作品作りを介して参加者同士を結ぶ方法も考えられる。操作的になりすぎないようグループの流れを把握しながら、素材の工夫によっても自分がグループにいるという実感を参加者に与えられることができたであろう。

②グループの体験がどのような意味をもたらしたのか

・積極性の賦活

グループ当初は、提供されているものにも促されるまで手を出さないなど、受身的な参加者もいたが、次第に自分が必要なものを自由に使うようになった。それに伴い、要求を積極的に伝える人が増えた。施設職員からは、日常生活の中で入所者が明るく、行動にメリハリが出てきたとの報告も聞かれた。

・作品の中に表現されたもの

コラージュをする人のほとんどが食に関するものであった。自分の好みを改めて確認するように、雑誌やカタログに載っているたくさんの写真から楽しそうに選ぶ様子が見られた。

eさんは普段から広告の切抜きを集めている。その切抜きを入れた箱を大事そうに抱えグループにやって来て、色画用紙にきれいに並べて貼り、一枚の作品にしていた。お刺身、おすしと、eさんなりにテーマを持って作っているようであった。時々、「これは家で食べたことがある。おばあさんが作ってくれたのだ。」と筆者に教えてくれ、eさんにとって広告の切抜きはただの紙切れではなく、大事な思い出にもつながるものであった。

食は原初的な欲求を満たすものであり、生きていく上で欠かすことのできない大切な営みであ

る。作品作りは、自分とじっくり向き合い、自分の「生」を再確認し実感する体験でもあったとも考えられるだろう。

・個が満たされて他者への関心へ

作品に感想を筆者から伝えると、みな嬉しそうな顔をし、表情豊かに説明をする人もいた。自分から作品を見せに来る人が次第に増え、また、その頃から周りの参加者の作品にも関心を向ける人が出てきた。他者である筆者から感想を伝えられることは、自分の好みや作品を作っているときに味わった感覚をもう一度そこで味わい直すことであり、自分を大事に見つめることにも通じるのではないだろうか。自分が受け容れられたと個が満たされた後、他者に関心を向けるという流れが観察された。

【終わりに】

本研究は、グループでの観察から検討考察したものである。グループで見られた変化の背景には常に、施設職員の日々の関わりがあることを忘れてはならない。グループが本当に役立つものとなるには、日常生活と連動させていく視点が不可欠である。限られた場で捉えられた様子や小さな変化を、いかに日常の援助に役立つ形で施設職員に伝えられるかが、大きな課題であると考えられる。

謝辞：グループに関心を寄せ、忙しい合間に入所者の日常での様子を伝えてくださった施設職員の方に感謝いたします。本研究は、大正大学村瀬嘉代子教授と同大学カウンセリング研究所相談員の並木桂氏が築いてこられた施設との連携、また心理的援助の基盤の上に行わせていただいたものであり、たくさんのご助言ご指導を賜りましたこと、深く感謝申し上げます。また論文執筆にあたり、聾学校教諭の経験がある同大学博士課程永石晃氏にもご助言をいただき、この場をお借りしてお礼申し上げます。

【文献】

- 青木省三 (1996) : 思春期ころのいる場所ー精神科外来から見えるもの. 岩波書店
- 青木省三 (2001) : 思春期の心の臨床. 金剛出版
- 畠瀬稔編訳 (1967) : ロジャーズ全集 7 プレイグループセラピー・集団管理. 岩崎学術出版社
- 河崎佳子 (1996) : 聾者の心理療法と「ことば」ー聴覚障害者施設における心理相談の試み. 心理臨床学研究 第 14 巻第 1 号
- 河崎佳子 (2000) : 静かな叫びー不就学ろう青年とかかわり続けた 9 年間. 発達 81
- 北山修 (1993) : 「自分と居場所 (北山修著作集 日本語臨床の深層 3)」。岩崎学術出版社
- 古賀恵理子、藤田保、小林豊生 (1994) : 聴覚障害者と精神医療. 臨床心理学研究 第 31 巻第 3 号
- 近藤喬一、鈴木純一編 (1999) : 集団精神療法ハンドブック. 金剛出版
- 村瀬嘉代子編 (1999) : 聴覚障害者の心理臨床. 日本評論社
- 村瀬嘉代子 (2003) : 統合的心理療法の考え方. 金剛出版
- 並木桂、村瀬嘉代子他 (2000) : 聴覚障害者に対する統合的アプローチーろう重複障害者生活労働施設での取り組みー. 安田生命社会事業団研究助成論文集第 36 号
- 並木桂 (2002) : 重複障害者に対する統合的アプローチ 第 1 報. 大正大学カウンセリング研究所紀要第 25 号
- 相楽多恵子 (1993) : 聴覚障害者における自立援助. 季刊 MIMI 第 60 号
- 山中康裕 (1999) : 心理臨床と表現療法. 金剛出版